

モデル漫画

木村敏雄(地質)

最近、私の退官のもよおしに関連して、或る人が「木村地質学」という言葉を使った。それで、そんな言葉づかいはしないでほしいと申し入れた。私が「地質学」という名の教科書を書いたとして、それについての学生言葉としての「木村地質学」はあり得るかも知れない。しかしそれは、「先生といわれるほどの馬鹿でなし」に似て、ほめられた意味を持つものではない。またあるイデオロギーの教祖であったとしたら、そのような言葉があり得る。しかし、幸にして、私はそのような教祖ではない。むしろ逆に、本郷に来てからしばらくの間は、学外にあってイデオロギーを標榜すると称する人達の“地質学”に、どのように対応するかを苦慮したことがある。ただし私は、イデオロギーでそれに対応したことはないし、また今の私にとっては遠い昔話である。

地質学という学問においては、自然を如何に解明するかが問題である。地質学はいつまでたっても地質学であって、それが個性をもつことはない。私の研究について、固有名詞を冠し得るものがあるとすれば、木村式野外地質調査法といった文字通り泥臭いものであって、自然を解明するための技術とか、手法である。

地質構造を作る原因は地下の深いところにある。それは当然のことであるにもかかわらず、実際に地質構造や地質構造発達史を研究するとき、地表にあらわれたものばかりに注目して、平面的考察に終わってしまうことが多い。ルービックキューブで一面だけ色が揃ったとき、「できたできた」と喜んでしまうのに似ている。私は温度や圧力の違いに応じて、地下のやや深いところから浅いところにかけて、どのように地質構造の違いができる

かということの研究してきたし、その研究方法を応用して日本の地質構造発達史について従来とは相当に異なる見解を得ている。そのことから、私の研究法について「木村地質学」と呼ぶ人があったのであろう。しかし、ルービックキューブの全面を仕上げたという段階にはまだほど遠い。ただルービックキューブと違って、ほとんどでき上がったと思いながら、最後にどんでん返しを喰うことだけはなさそうだと思っている。

ルービックキューブの一面合わせといえば、最近地学の上ではやっている“モデル”と称するものにそのようなものが多い。そしてその非常に多くがプレートテクトニクス説に関連している。プレートテクトニクス説の中で、大洋プレートが大陸プレートの下にもぐり込むという考えには確かに立体性がある。しかし断面を考えるとときには断面だけの一面的思考になるし、構造帯の形式という問題になると、地表面だけについての一面的思考になる。このように書くと、虎の威を借りた人達はすぐに私はプレートテクトニクス説に反対しているのだという。そうではなくて、私はプレートテクトニクス説は正しいと信じているけれども、その説によって推論可能なほんの少しからはみ出した考えや、それに悪のりした考えが多すぎると云いたいのである。

モデルは、数値解析によって立証されたとき、またはそれを作製することによって、その作製に用いたデータ以外の多数の事実や現象をうまく説明できるとき、信頼性があると認め得る。またモデルのイラストはしばしば我々の想像力をわき立たせ、学問を推進させる。ただしそのイラストに価値があるのは、提唱された最初の段階のもので

ある。ここで私がプレートテクトニクス説に悪のりしたという“モデル”にはそのような意味での信頼性はないし、そのイラストに目新しさもない。

本州弧の西北隅にある飛騨帯が中国や朝鮮半島とかつて一体となって固定していて、本州弧の他の部分は、いくつかの“小陸塊”として赤道近くからつぎつぎに移動してきて寄せ集められたとする考えもまたキューブの一面合せの“モデル”である。それにもかかわらず、地下深くの地殻構造までもこのようにして出来たと考え、そのことがはっきりと証明されたとする人がいるのだからすさまじい。地下深くはいうまでもなく、地表近くについてもこの考えは誤っているのである。このように、“小陸塊”が赤道近くからつぎつぎに移動したと考えたのは、その“小陸塊”区の古地磁気がそこがかつて赤道近くに位置したことを示したからである。ところが一面合せが完成しそうだ喜んでいたら人達にどんでん返しがあった。北シナ-朝鮮半島(中・朝陸地)は中部シベリアから遠く離れて、かつて赤道近くに位置していたことがわかったからである。本州弧の区域は長い間、中・朝陸地と共に、赤道近くにあったものである。私の研究室の者が、東アジアを固定させて、“日本列島内部の小陸塊”をつぎつぎに移動させる考えを“天動説”だといったが、まさしくその比喻の通りであった。飛騨帯を固定させるべきではなくて、本州弧区全体が中・朝陸地と共に移動していたのであって、“地動説”をとるべきものであった。

本州弧区域が、少なくともその主体が、中・朝陸地から遠く離れていなかった、あるいは少なくともそれと同一の生物区をなしていたことは、古生物の研究からよく知られていたことである。また、形成時代を異にする“小陸塊”の平面的なつながり合せで本州弧の形成が説明し得ないことは、構造地質学や層序学のこれまでの研究からわかり切っていたことだったのである。

構造発達史の過程の諸現象のすべてを、プレ-

テクトニクス説によって数値解析可能なまでのモデルにまで作り上げることは、まだ誰もなし得ていない。大洋プレートのサブダクション、地下での熱の発生、マグマを形成する物理化学現象、マグマの上昇、それに伴う周辺地塊の変形などの諸現象がそこに包含される。その1つ1つがまだ完全にモデル化し切れないものがある。“小陸塊”寄せ集め説の誤りのもとは、特定のデータのみをプレートテクトニクス説にむりやりにあてはめるという、モデル作製法の誤りにある。その“モデル”は1つ1つの陸塊が大洋プレートと共に移動して固定大陸に付加するときの漫画の1コマ1コマとしてあらわされる。“小陸塊”の形成の過程や、1コマと次の1コマとのつながりが問われることはない。そこにカタストロフィズム(天変地異説)復活のきざしさえある。ネオカタストロフィズムと私が呼んでいるものである。このようなものはモデルと称するに値しない。そのイラストは「モデル漫画」というべきものであろう。

テレビが普及し、漫画本が大学生に好んで読まれる今日、言葉を使つての思考の退化は著しく、なげかわしいものがある。思考力の退化が、コピーの容易さが、複写した文献の中でのモデル漫画だけに目をさらすという風潮を作り、かつ助長する。学生にそのことを注意すると、「だって分りやすいですもの」という。「単純で分りやすいものは正しい」とする間違つた考えさえ生まれかけている。どうしたらそんな風潮の蔓延が防げるのかと、退官を前にして私は真剣に考えている。